

契約彼女は冷徹エリートの
甘く過激な恋に溺れたい

第一章 消したい夜

「うーん……」

深い眠りの海の底でかすかにアラームが響いている。

(もう朝……?)

二十九回目の誕生日を迎えたあたりから、朝が来るのが早くなった気がする。目を閉じたまましぶしぶ腕を伸ばしたが、枕元がやたらに広がってスマートフォンに手が届かない。シートもなぜかいつもよりすべすべだ。

あるはずの場所にあるべきものがなく、やみくもに手探りした私は、次の瞬間ぎよつとして目を開けた。朦朧もろろうとしていた頭が一気に覚醒する。

「……………」

恐ろしいことに、私が掴つかんでいるのは目覚まし時計代わりにしているスマートフォンではなく、ありえないもの——見知らぬ男の髪だったのだ。

恐怖にわななきながらそつと手を放し、まだ眠っている男の寝顔をまじまじと見つめた。

断片的に昨夜の記憶が甦よみがえってきたが、目の前の男と繋がつながらない。窓は暗く、まだ真夜中のようだ。

ヘッドボードの仕様からして、ここはホテル。真つ暗な部屋にベッド脇の調光ランプだけがうつすらと灯ともされている。動揺で全身から血の気が引いた。

とにかく早くアラームを止めなければ——この男が目を覚ます前に。

しかし男の頭上でまたたいているスマートフォンを掴んでみれば、私のもものではなかった。しかもアラームではなく着信きしんだった。

「香子」

画面に女性の名前が表示されているのを見て余計に動転する。出るわけにはいかないが、かといって男を起こすなど絶対に無理だ。

「んー……」

私が慌あわててもたもたしている間に、しつこく鳴り続ける呼び出し音で眠りが浅あくなったらしく、男が唸うなった。咄ちや嗟せにスマートフォンを布団の中に突つ込んだが着信音はさほど小さくならない。

(……ええい！)

切羽詰きりうぢまった私は心の中で“ごめんなさい”と叫びながら電源を落としてしまった。冷や汗をかきつつベッドに身を伏せ、息をひそめる。するとしばらくして男は寝返りを打ち、こちらに背を向けた。どうやらまた眠ねったようだった。

(助たすかった……)

恐る恐る顔を上げたところで、非常事態だというのに私は思わず目の前の背中に見とれてしまった。

広い肩幅に、ほどよく鍛えられ引き締しまったなめらかな肌。薄明かりが陰影を落とし、それはこの上なく魅力的に見えた。こんなに美しい男性の背中を見るのは初めてだった。

しかし、そこですぐ現実げんじつに立ち返かえった。布団ふとんから覗のぞく男の上半身は裸。私も、裸。

「……………」

無音で唸り、シートに突つ伏ふした。自分のしでかしたことを改めて突きつけられ、この場から消えてしまいたくなる。早くここから出なければ——逃げたところで現実げんじつは消せないが、動転した私の頭に咄ちや嗟せに浮うかんだのはそれだけだった。

アルコールの霧もが晴れてくると、昨夜の恥ちずかしい記憶が徐々に甦よみがってきた。私のような女にこんな事態きざいが起きるなんて、きつと相手も酔よっていたのだらう。朝になり正気に戻かえった男が気まずそうな顔で逃げていく様ようが、まざまざと浮うかぶ。顔を合わせたところで前向きな展開てんがが待まちっていると到底思おもえない。真夜中に電話でんわしてくるような関係かんけいの女性にょせいがいるのだから。お互いになかったことにした方がいいに決かまっている。

暗くらがりに慣れてきた目を凝こらし周囲を見回すと、少し離れた肘掛ひじかけ椅子いすに私のワンピースとバッグがあるのが見えた。自分で掛けたのか男が掛けてくれたのかはわからないが、そんなことを思い出だしている暇ひまはない。

布団を動かさないうそつとベッドから出たところで、視界が回まわって派手はでに転ころんだ。どうやら昨夜はかなり飲んでいたようだ。分厚ぶんこうい絨毯じゅうたんのおかげで痛いたくはなかったが、地響ぢきやうきでも立ててしまったのか、ベッドから寝返りを打うつ音が聞こえてきた。

お願いだから目を覚まさないで！

必死に念じながら息を殺して床に這いつくばる。ありがたいことにそれきりベッドが静かになったので、椅子の陰に屈んで手早く服を着る。ストッキングが見つからず、仕方なく床を這って捜している、ベッドの男が寝ている側の床にそれらしいものが何かと一緒に落ちているのが見えた。どうやらネクタイが絡まっているらしい。しかし手を伸ばしかけたところで男の咳が響き、恐怖で跳び上がる。緊張が限界を迎えていた私はストッキングの回収を諦めた。

財布、スマートフォン、仕事のファイル。靴を見つけ、バッグの中身を手探りで確かめると、忍び足で出口を目指す。男が目を開けていたらと思うと怖くてたまらず、とてもではないが後ろを振り返る余裕はなかった。

音を立てないようにそつとドアを閉めた時、無事に逃げおおせた安堵とともに罪悪感がチクリと胸を刺した。地上階に降りるエレベーターに掲示してあるレストラン案内からここが有名な高級ホテルだとわかると、それはさらに強くなった。部屋に戻って宿泊代を置いてこようかという考えが頭を過つたが、そんな勇氣はない。そもそも鍵を持っていないので、フロントで呼び出してもらって男を起こさない限りもう部屋に入れないのだ。

時刻は午前二時。大理石に響き渡るヒールの音に冷や汗をかきつつ静かなロビーを横切り、深夜の街に逃げ出した。ストッキングを穿いていない季節外れの生足が心許ない。お洒落のために選んだ薄手のワンピースに秋の冷えた夜風がしみて、昨夜の失恋の惨めな記憶が甦ってくる。

道の向こう側にネットカフェの明かりを見つけた私は救われた気分になり、また勢いづいて走り

出した。どん底だと思っていた状況からさらに地獄を見ると、元のどん底がありがたく思えてくる。始発まであそこで凌ごう。それからアパートに戻ってシャワーを浴びて、いつも通りに出勤しよう。そうして全部なかったことにすればいい。あの男とは二度と会うことはないのだから——しかし、運命というものは往々にして予定通りには進まないものなのだ。

大手電機メーカー本社ビル五階、エレベーターを降りて右に突き当たった曲がり角の小部屋。そこが私の職場だ。重い足取りで廊下を進み、ため息を一つついてから胸に下げたIDカードをドアにかざした。

(開かなきゃいいのに……)

そんな私の後ろ向きな願いも虚しく、ロックは軽快な電子音とともに何の問題もなく外れた。

IDカードには「総合企画本部 江藤奈都」と書かれている。通常の部署は社員ならば誰でも出入りできるが、私が所属する部署は秘密保持のためセキュリティが特に厳しく、登録された所属人員しか入室できない仕組みになっている。もう一度ため息をついてからIDカードを裏返しにして胸に下げ、ドアを押し開いた。

裏返しにするのには理由がある。顔写真が気に入らないのだ。副主任に昇格すれば再撮影されるはずだが昨年は昇格できず、写真は七年前の入社当時のままだ。社会人になってから自分なりに髪型やメイクを頑張ってきたのに、素地はこれだよと格付け宣告されている気分になる。

所属人員三十名ほどのこぢんまりした部屋にさっと視線を走らせた私は、自分の席がある島を見

て反射的に目を伏せた。

「おはようございます」

「おはよう、江藤さん」

意識しすぎて少し素つ気ない挨拶になつてしまった私とは対照的に、隣の席の彼は顔を上げて爽やかな笑顔を見せた。直属の上司の東条主任だ。この三年間、私の視線の先にはいつも彼がいた。仕事もお洒落も、彼が私のモチベーションの源だった。

でも、それは昨日までの話だ。今朝、出勤する足を何度も止めて重いため息をついたのは、慣れないネットカフェで始発電車まで一夜を明かした疲れのせいだけではない。ほんの十二時間ほどの出来事——三年もの思慕に告白の機会すら与えてもらえず惨めに幕が引かれた、失恋の生傷のせいだ。

「昨日はお疲れさま」

やはりこの話題は避けられない。心の鎧の緒を締めるように、膝に乗せたバッグの持ち手をきつく握り締める。

「昨日はごちそうさまでした。とても美味しかったです。お言葉に甘えてしまつてすみません」

明るく答えながら、気づかれない程度に彼から目の焦点をずらして直視を避けた。彼の笑顔や草、言葉の一つ一つに期待を膨らませた日々は昨日で終わった。心の傷を悟られまいと私は必死だった。

「友達がやつてる店だから半分は奴の奢りだし。また何かで使つてやつてよ。それと——」

そこで彼は私に少し顔を寄せて声をひそめた。

「美緒のこと、秘密ね」

「美緒」——彼が漏らした親密な呼び名に、生傷を抉られるような痛みが走る。

「は」

無理やり微笑んで頷くと、この話題がこれで終わることを願いながら、何かを捜すふりをしてバッグの中をかき回した。

彼がうちの部署に異動してきたのは三年前の秋だった。

『今日からチームに加わることになった東条主任だ。この前は広報部の渉外担当だから、マスコミ業界に顔が広い。マーケティング業務に新しい風を入れてくれると思う。彼から色々学んでほしい』

うちの会社にこんなスマートな男性社員がいたなんて。

部長から紹介された時、私はしばし彼に見とれてしまった。

電機メーカーというお堅い業種のせいか、うちの会社は雰囲気少々泥臭い。加えて、社内では私服の上に全社統一された作業着を羽織る規則になっている。工場のラインスタッフも本社スタッフも意識を一つにする“という社是にのっとっているらしい。その決してお洒落とは言えない作業着を着なくても許されるのは、キャビンアテンダントのように華やかなユニフォームに身を包んで玄関を飾る受付嬢と、広報部や宣伝部といった「業界系」部署ぐらいだ。

『あ、あの、江藤奈都です。よろしくお願ひします』
部長の咳払いで私の挨拶が待たれていることに気づき、慌てて頭を下げる。それから動悸を鎮めつつ、部長と言葉を交わす彼をこっそり観察した。

企画部に来てても作業着を免除されるのか、彼が着ている爽やかなブルーのシャツは広報部の後光がさしているようだった。上背のある細身の身体に、甘めのすっきりとした顔立ち、優しく穏やかな声。

気難しい技術部のおじさんとの折衝が多い私にとって、彼はまるで天から舞い降りてきた王子か、芸能人のように輝いて見えた。

総合企画本部は家電から情報通信、電子部品まで様々な分野を横断して企画立案するという、業界内でも珍しい遊撃部隊だ。これまで事業部への支援のほかに新規分野への参入検討や新技術の用途開発などを担ってきたが、この度マーケティング業務が追加されることになった。

しかし割ける人員はあまりいない。担当となったのは少しくたびれた係長と私だけ。それも元々の業務と掛け持ちだ。おまけに二人ともマーケティングは素人で、掴みどころのない新しい仕事に手をこまねいていた。そこで体制強化を図るべく、トレンドの発信元であるマスコミとパイプを持つ東条主任が呼ばれたらしい。

当時、入社四年目だった私は自身の適性に迷いを感じていた。部署設立時は社内中からベテラン社員が集められたのに対し、私は人事部の試みで選ばれた初の新入社員配属だった。事業部でみっちり腰を据えて特定商品のエキスパートになっていく本来の新人育成ルートとは異なり、総合企

画本部の仕事は短期間でミッションが変わるうえ、高い専門性が求められた。ベテランの同僚たちの中でただ一人新人の私は、その度に新しい分野の専門知識を隅から隅まで急ピッチで勉強しなければならなかった。知識の土台がなければ骨のある戦略的な企画にならないからだ。

映像機器から調理家電、その次は情報機器。取り組むテーマは次々と変わる。難解な技術資料を前に、夜な夜な自宅で船を漕ぎながら勉強を重ねる日々が続いた。でも、肝心の企画は採用に足るアイデアをなかなか捻り出せなかった。人事の試みに応えたかったが、新人には荷が重すぎたのだ。私は企画に向いていないのかもしれない。電機メーカーに向いていないのかもしれない――

しかし、思い悩んでいた私は、東条主任が来たその日から俄然元気になった。女とはそんな生き物ではないだろうか。仕事しか興味がないと口では言っているけど、心のどこかでは素敵な相手との恋も夢見ている、その先に仕事と結婚の二兎を描いてしまう。

新しい上司である東条主任に認められたくて、私は必死でついていった。憧れはやがて恋に変わった。平凡な女だつて夢を見る。冴えない女だつて王子に恋をする。分不相応だとわかっているけど、誰かを好きになる心は理屈や世の中のルールに従ってくれない。

私にはそれまであまり自慢できるような恋愛経験がなかった。
高校時代、片思いしていた男子は私の友達と付き合い始めた。三年間、私は仲の良い二人を眺めていることしかできなかった。

大学時代にできた初彼は、告白したわけでもされたわけでもなく、友人たちに押されて付き合い合っている状態になっただけだった。あとから思えば、どんどん彼氏持ちになる周囲に焦っていたのも

あるし、きっと相手もそうだったのだろう。さほど盛り上がりがないままカップルらしい一通りのことをしているうち、じきに彼は私より綺麗な子をつかまえて去っていった。

社会人になっても似たようなものだ。二人目の彼は合コンのあぶれ者同士。好きになろうと頑張ったが、うまくいかなかった。同じく合コンで知り合った三人目の彼は、付き合い始めてしばらくすると、嬉しさを隠しきれない顔で『前の彼女とヨリが戻った。ごめん』と言い放った。涙はじきに傷に変わり、やがて薄れていった。

大好きな人にバージンを捧げた思い出も、相思相愛の甘い思い出もない。そうこうしているうちに二十代後半に突入してしまった。砂漠のような恋愛人生の最後に、神様はプレゼントを用意していてくれないだろうか。それなら今までの侘しさも報われるのに。

東条主任は同じマーケティングチームの上司であっても、仕事のすべてを共有しているわけではない。二人ともそれぞれに別のチームと別の仕事を持っていた。でも彼はいつも私に目をかけてくれて、よくランチに連れ出しては色々な相談に乗ってくれた。今思えば勘違いも甚だしいが、彼が私に向けてくれる笑顔や言葉に特別なものが含まれているような気がしていた。恋人と少し前に別れて現在フリーだと聞いてからは、さりげなく好意を伝えようと頑張った。

そんなある日、東条主任が人目を憚って私を食事に誘ってきた。

『明日の夜、空いてる？ 仕事のあと』

『えっ？ 空いてますけど……』

『友達がレストランやってるんだけどさ、行かない？ 紹介したいし』

少し前に勇気を出して私からご飯に誘ったものの、仕事が忙しくて実現しなかったことがあった。それを覚えていてくれたのだと私は舞い上がった。

彼からの初めての誘い。しかもプライベートのお友達に紹介されるって……

その夜、私はクローゼットからありったけの服を取り出して山と積み、ああでもないこうでもないかと散々悩んだ。あまりセンスに自信はない。それでもオフィスで浮かない範囲で精一杯お洒落なワンピースを選び、お風呂で肌をピカピカに磨いた。

気持ち伝えてしまおうか？ だめ、そんな勇気はない。でも、もしいい雰囲気になったら……？ ベッドに入ってから明け方まで悶々と悩んだ。

ところが当日、いよいよ約束の場に臨もうという時になって私は首を捻った。同じ職場なのに、なぜか現地集合だったのだ。

その理由はすぐにわかった。先に着いて待っていた私は、店の入口に東条主任が現れたのを見て伸び上がり、勢いよく手を振った。――が、その手は途中で固まった。東条主任が一人ではなかったからだ。主任の後ろから顔を出した美人には見覚えがあった。女性と一緒だなんて聞いていない。二人はこやかに近づいてくる。はっと我に返り、おかしな位置で止まっていた手を下げ、引き

つった顔を笑顔に形づくった。

『遅れてごめんね。彼女の上がりなが長引いてしまって』

『ごめんなさい』

彼女が頭を下げると、艶やかに巻かれた見事な髪が揺れて彼に触れた。

『改めて紹介するよ。知ってるよね？ うちの会社の受付の堀内さん』

『堀内美緒です。江藤さんのこと、東条主任からいつも伺ってます』

東条主任の隣で彼女はとろんと蕩けそうに甘い笑顔を見せた。

『いつも伺ってます』——つまり、二人は会社の外でいつも一緒にいるということだ。空っぽになつた頭の中で、カーンと試合終了の鐘の音が響いた。

彼女とは初対面ではない。東条主任と外出から帰ってきて受付の前を通る時、よく『お疲れさまです』と声をかけられた。ただし、それは明らかに私ではなく東条主任に向けられたものだった。背筋を伸ばしてお辞儀を返しながら、いつも私は考えた。受付は華やかだけど、私は美人に生まれついても今の仕事を選ぶ、と。東条主任とともに仕事に取り組めることを誇らしく思っていた。

その安っぽいプライドにピシリとヒビが入り、木っ端微塵に砕け散った。

会社で東条主任と一緒に過ごしている時間は誰よりも長い。さりげなくアプローチしたし、可愛く見られようと毎日お洒落した。にもかかわらず、一番近くにいるアドバンテージがありながら、私は女性として彼の『対象』にはならなかった。仕事で認められることと女としての価値はまったく別物。当たり前のことなのに、私は自分に都合よく混同していた。

『彼女が江藤さんと一度話してみたって言うもんだから』

『わがまま言つてごめんさい』

二人の言葉が片耳からもう片方の耳へ、私の頭を通り過ぎていく。四角いテーブル席で東条主任と堀内さんがあちらに並び、私はこちら側に一人だ。どう見ても明らかだったが、往生際の悪い私

は一縷の可能性にかけて空気を読まない質問をした。

『あの、お二人はその、付き合つ……』

『はい』

東条主任が口を開くより先に、堀内さんが嬉しそうに答えた。

『彼から誘ってくれたんですけど、私も前から懂れて……。ね？』

甘えるような『ね？』に、東条主任が照れ笑いを浮かべて頷いた。私が勝手に対抗意識を燃やして『颯爽と』受付前を闊歩している横で、二人は熱い視線を交わしていたということだ。

まだ料理のオーダーすらしていないのに、この数分だけで私を打ちのめすのに十分だった。もういいよと心の中で悲鳴を上げる。もう十分わかったから。

昼間は作業着で隠れていたワンピースの胸元をメニユーで隠す。お洒落なんかしてくるんじゃない。こんな張り切った格好、期待が見え見えだ。

盾のようにメニユーを握り締める私に、堀内さんが笑顔で話しかけてくる。

『一緒にお仕事してる江藤さんに懂れました。お喋りできて嬉しいです』

『いえ、私は懂れてもらえるような者では……』

持ち上げられると余計に惨めだ。はは、とぎこちなく笑い返すのが精一杯だった。

悪夢のような二時間ののち、店の前でようやく二人と別れた私は駅に向かって歩き始めた。

泣くもんか。項垂れた姿なんか、見せるもんか。

もてない負け犬女にだってプライドはある。二人の視界から完全に消えたと思ってもなお、私は顔を上げて歩き続けた。

店はともお洒落で、料理もたぶん美味しかったのだと思う。しかし「砂を噛む」とはこのことで、私にはまったく味がわからなかった。内心の消沈は隠しきれずに表情に出してしまっていただろう。お粗末な演技をごまかそうと、私は普段飲まないワインを食事の間ずっと口に運び続けていた。それが今頃きいてくる。歩くと余計に酔いが回り、そのうち足元の地面が波打つように揺れ始めた。そのせいだろう。歩道の真ん中を歩いてきたカップルを避けた拍子に躓いてしまい、よろけて壁に手をついた。カップルは気づきもせず、二人の世界に浸ったまま通り過ぎていく。ぼんやりと彼らを見送ってからため息をつき、辺りを見回した。

『あれ……？』

一体どこをどう歩いたのか、そこは見知らぬ通りだった。どうやら駅とは違う方向に来てしまったらしい。脱げたヒールに踵を押し込んで再び歩き出そうとした時、自分の格好を見下ろした私はふとあることに思い至った。

もしかすると東条主任は私の好意が迷惑で、牽制のために今日の食事をセッティングした……？ 足元の地面がぱっくり割れて深い裂け目に落ちたみたいに、目の前が真っ暗になった。自分の存在さえも恥ずかしく思え、いたたまれなくなった。

零れた涙を指先で拭い、泣くまいと夜空を見上げる。

子供の頃は、大人になったら好きな人と結婚するのだと当たり前信じていた。でも、二十九歳

の現実はまだたく違った。みんなは恋を手に入れて幸せになっていくのに、私は好きな人と結ばれたことが一度もない。美人ではないにしてもごく一般的な顔だと思っし、自分を磨く努力を放棄しているわけでもないのに。きつと外見などではなく、もつと本質的なもの——女としての決定的な何かが生まれつきだめなのだろう。

もうすぐ三十歳。ちよつと早すぎるけど、恋することを諦めたら楽に生きられるだろうか。

『もう、女やめよっかな』

踏ん切りをつけようと、小さく声に出してみる。それからワンピースの胸元をつまんで、これまで男性に褒められた唯一のポイントである胸の谷間を見下ろした。もう出番はないんだろうな。もつとも、今までも出番らしい出番はなかったけど。

その時、私の立っている場所から少し先でドアが開き、幾人かの男性が出てきた。存在に気づかず通り過ぎてしまうほど目立たない、隠れ家のような風情の店だ。人気がなくなつてから近づいてみると、ダークな色味のどつしりした扉に何やらバーらしき名前が小さく書いてある。

私はそれまで一人でバーに入ったことがなかった。恋愛小説ばかりで実体験の乏しい私の頭の中では、バーとはベタに「いい男といい女が出会う場所」だった。この時の私は相当酔っていたのだと思う。そうでなければ、このあとの発想と行動は普段の私では考えられないものだった。

バーのドアの前に立ち、耳鳴りのする頭で考えた。

一番綺麗なはずの二十代がもうすぐ終わる。一度も輝かず、一度も女になりきれずにこのまま朽ちてしまうなんて惨めすぎる。諦めてしまう前に、最後に試してみようか。本当に私は箸にも棒に

も掛からない魅力ゼロの女なのかを。どうせ二度と来ない店だから、いいじゃない。これでだめなら諦めよう。

鼻から大きく息を吸い込むと、私は重いドアを押し開けた。

「あああ……」

回想を強制終了して頭を抱え込んだ私の前で、同期の河本菜由子が箸を止め、呆れたように顔を上げた。

「何なのよ。ろくに人の話を聞いてないかと思えば急に唸ってさあ」

「……ごめん。何でもない」

ため息をついて、私は社員食堂の定食をボソボソとつつき始めた。

告白されたこともナンパされたこともない女が酔って挑んだ「逆ナン」から数日。あれから私は一度は忘れてしまったあの夜の記憶を何度も手繰り寄せては、その度に途中で断念している。恥ずかしい場面にさしかかると記憶が飛んでしまうのだ。

いや。飛んだことにして頭が勝手に事実を隠蔽してしまおうらしい。そのくせ自分へのお仕置きなのか辱めなのか、気づけば回想を始めるという状態を、土日をまたいでずっと繰り返している。

あの夜、決死の覚悟でバーに入った私はまずカウンターを指した。バーといえばカウンターだろうという単純な理由からだ。暗さに目が慣れず、緊張もあつて段差で躓きながらかなり無様に着席したことを覚えている。さっぱりわからない名前が並んだメニューとしばらくにらめっこした

あと、一番きつそうな名前のお酒をオーダーした。大胆になるにはまだアルコールが足りなかったのだ。

お酒は意外と美味しかった。喉が渴いていたこともあつてすぐに飲み干してしまい、また選ぶのが面倒臭かったので「同じものを」と告げる。それからはちびちび飲みながら、どうすればいいのかを考えた。

カウンターの一つ席を空けた隣では男が一人、静かにグラスを傾けている。どんな人か見たいが、露骨に横を向くわけにはいかない。視界の端で捉えた彼は座高と脚の長さからして背が高く、グラスを持つ手の甲を見るに年齢は若めという程度しかわからなかった。

一番楽な筋書きでは座っているだけで何かが起こるのだが、現実はどういうまく運ばない。そもそもすぐに声がかかるような女なら、こんな苦勞はしていないのだ。

二杯目もじきになくなった。行け、と自分に命令する。行きたくないよ、とまともな私が抵抗する。さっきの決意を忘れたの？ このまま終わっちゃっていいの？

その頃には頭が膨張したようにばくばくと脈打っていたが、足りない勇気を補うために最後のつもりで三杯目を頼んだ。そうしてバーテンダーがカウンターの奥に下がった時、私は持てる勇気を結集して隣に向き直った。

しかし男性の顔に焦点が合わず、ゆらりと揺れて——記憶はいつもここでシャットダウンしてしまふ。あとは断片的な映像や声や感触が掴みどころなく浮かんだり消えたりするだけだ。それが結構刺激的で生々しいので、余計に夢かうつつかわからない。

一体私は何をやらかしてしまったのだろうか？　そもそも本当に行き着くところまで行ってしまったのだろうか？　時間が経ってしまおうとそれすらもあやふやだった。

あとで確かめたら財布の中身はまったく減っておらず、バーの代金を支払った形跡がなかった。もう忘れるしかない。ホテル代とバーの代金は申し訳ないことをしたが、二度と会うこともない相手だ。

(どうかあの男性がリッチな人でありませうように)

心の中で懺悔していると、菜由子が鋭い質問を投げかけてきた。

「そういえば、どうして企画本部の人たちとお昼行かなくなったの？」

不意打ちだったので返答に一瞬詰まる。

これまで私は職場の同僚たちと連れ立ってお昼に出かけていた。当然、その中には東条主任も含まれている。あの翌日——先週の金曜日は何とか耐えたものの、やはり一日中彼を見ているのは辛かった。だから今週からは「同期と親睦を深めるため」と、もつともらしい理由をつけて逃げ出してしまった。ちょうどタイミングよく、菜由子も先輩が産休に入ったために昼食仲間に困っているというので渡りに船だった。

「……たまには違う空気も吸いたいなと思って」

「あーわかるかも。企画本部ってちよつとエキセントリックな雰囲気だもんね」

「うん。基本的に全員オタク」

菜由子の言葉に便乗して話を合わせる。

総合企画本部はみんな個性的で、いわゆる「電機オタク」と呼ばれる人ばかりだ。ある意味オタクでなければやっていけない仕事でもある。しかし、私はそうなれなかった。電機メーカーにいなから電化製品を愛せないようでは、いい企画を生み出せるはずがないのに。

「大丈夫、染まってないよ。ナツは企画にいても堅いままだよ」

菜由子が何気なく口にした「堅い」という言葉に、箸を持つ私の手が一瞬だけ止まった。

『彼が褒めてました。江藤さんとは仕事しやすいって。堅くて女を出さないから』

友人のいる厨房に顔を出すため東条主任が席を立った時、堀内さんが私に言った言葉だ。女として認めてもらいたくて一生懸命だったのに、彼の目には女に見えていなかったということだ。好きな人の言葉だから余計に突き刺さった。

昔、初彼が離れていった時にも似たようなことを言われたのを思い出す。女の姿をしていても女としての天性の甘さや色気がない。そういうことなのだろう。

(……もういいじゃない。この先誰も好きにならなければ、そんなことで悩む必要もないんだし)

そう結論づけ、壁の時計を見て食べるペースを少し上げた。社食は混雑のピークを過ぎて人が引け始めている。いつの間にか菜由子は食べ終えていて暇そうだったので、聞き逃した最初の話題を振った。

「ところで、さっきは何の話してたんだっけ？　私が唸る前」

「もう、ナツったらホントに全然聞いてなかったんだねー」

それから菜由子は急に小さな声になって、こちらに顔を寄せて囁いた。

「リストラよ、リストラ」

「リストラ？」

「うちの会社、近いうちに組織改革やるらしいよ。体質がぬるいって前から言われてたじゃない？ 社外から切れ者を招聘しょうへいしてるし、かなり本気っぽい」

「へえ……切れ者……」

これはまずい。稼ぎのない管理部門の中でも企画は真つ先にテコ入れされるだろう。その中で誰が危ないかといえば、若輩の私ではないか。元々なかった食欲がさらに落ちた。

筆頭の稼ぎ手部門、電子部品営業にいる茉由子は余裕だ。他人のゴシップでも語るかのように喋っている。

「外資で働いてたこともある厳しい人らしい」

「うわ、外資？ 鎖国したいよ」

「そんなこと言ったら生き残れない時代なんだよ」

外資は日本の電機メーカーの敵だ。終身雇用、年功序列のぬるま湯にいつまでも浸ひたかっていたいのに。

「そんな情報、全然知らなかった。うちの部って陸の孤島だから」

「これはまだ伏せられてて、隠密かくみつに進めてるらしいよ。私も人事部の子からこっそり教えてもらったの。だからナツも他言無用ね」

「わかった」

企画本部も開発計画などの機密情報を扱っているが、機密情報にも色々あるものだなと神妙に頷く。

「その外資企業の切れ者は記憶力がすごくて、一度見た社員データを完璧に記憶するらしいよ。ルックスはすごくいいんだけど、絶対に近づいちゃだめ」

「名前は何ていうの？」

陸の孤島にいる私には接点などないに決まっているが、とりあえず名前ぐらいは聞いておこう。廊下でそんな名札を見かけたら避けて通らねば。

「皆川みながわ佑人。背が高くして眼鏡かけてる」

「背が高くして眼鏡……どこにでもいそうな特徴だね」

大した興味もなく、ご飯をかき込みながらガチガチの堅物男を想像する。すると突然、茉由子が慌て始めた。

「ああつ、噂うわさをすれば影だよ。早く食べてよ、ナツ！ 昼休みの終わりになってもダラダラ食べてたら目つけられそう」

「お昼を食べてるだけで文句言われるなんて、どんな鬼よ」

「前の担当企業では死神って言われ……やだ、こっちは見た」

「そんな、目が合ったからって殺されるわけじゃ——」

この時、どうして私は顔を上げてしまったのだろうか。

少し離れた場所に、ぱりっとしたスーツに紺色のネクタイ姿の背の高い男が立っていた。作業着

を着ていないことを差し引いてもひときわ目立っているのは、氷のように冷ややかな雰囲気の子供だろうか。彼を見た途端、私は視線を逸らせなくなってしまった。

こんなに離れているのに、なぜ私は彼のネクタイの柄がはつきり見えるのだろう。というより、なぜあのネクタイの柄を知っているのだろうか？

その時、フラッシュバックのように、ベージュのストッキングと紺色のネクタイが絡まる光景が浮かんだ。

(まさか——)

「ちよつと何ガソ見してんのよ、ナツ……！ やばいって」

彼が立っている場所と私だけが切り取られたように、周囲の音も声も遠くに聞こえた。頭のどこかではもうわかつていたのだと思う。何食わぬ顔で視線を逸らせば、それで逃げられたのかもしれない。

それでも私は確かめずにはいられなかった。彼の胸元に下がっていた視線を恐る恐る顔に戻す。眼鏡の奥の冷徹な視線とぶつかった瞬間に全身がヒヤリと冷たくなり、それから燃えるように熱くなった。

ベッドで目覚めた時に見た寝顔の端正な目鼻立ち。あの顔に眼鏡をかけたら——

「あ……」

思わず小さく声を漏らしてしまい、手で口を押さえる。じっと私を捉えている切れ長の目がかすかに表情を変えたかと思うと、視線はすつと私を通り過ぎていった。時間にしてほんの数秒。でも

それは強烈なストロボのように、私に鮮明な残像を刻み付けた。

「ああもう……やばかったよ！ ナツがじろじろ見るからさあ」

茉由子の声を聞きながら、意識の隅で彼の姿を追う。先ほどは気づかなかったが彼には連れがいて、コーヒを飲みに来たらしい。彼はカップを片手に、年配の男性と言葉を交わしながら窓辺のテーブルへと遠ざかっていった。

「ナツ、もしかして皆川さんのこと知ってるの？」

「いやまさか、全然……まったく」

久しぶりに声を出したように口がからからで、しどろもどろになった。

「ね？ いい男だけど氷みたいじゃない？ もう行こうよ。サボりの常習とか思われたらまずい」

茉由子に促され、上の空で立ち上がる。お盆を持つ私の手は震えていた。

あの癖のない黒髪のさらりとした感触を私は知っている。あの少し薄めの唇が理性をくるわせるキスをするこも。意識の底に押し込めていた記憶が次々と甦る。茉由子と別れて職場に戻っても、私はしばらく上の空のままだった。

彼も間違はなく私を覚えている。お酒で記憶をなくすようなタイプではないはずだ。

氷なのか、炎なのか。私は何に触れてしまったのだろうか？

「お疲れさまです」

広々としたエントランスホールにしとやかな声が響く。顔を上げると、堀内さんが東条主任に甘い視線を送っていた。二人だけのアイコンタクトだと知っていても、これまでと同じように東条主任とともに会釈を返すしかない。すると堀内さんは私と視線を合わせ、再びにっこりと微笑んだ。でもそれは私に向けられているようでそうではなく、東条主任や周囲の男たちに見られていることを意識したものだ。もてる女は自分の見せ方を熟知していて、あらゆる機会を無駄にしないのだ。

華やかなスカートを首元に結んだ彼女に、ロビーを通る幾人かの若い男性社員たちがちらちらと視線を向けている。あんな恋人がいたら、きっと東条主任も誇らしいだろう。女としての格の違いを見せつけられながら、エレベーターホールまで逃げるような気分で歩いた。

「疲れた？」

エレベーターのボタンを押した東条主任が私を見下ろし、優しい口調で言った。

「今日は早く帰ったらいいよ」

「大丈夫です」

精一杯作った私の笑顔はすぐに床の方を向いた。彼女の笑顔の直後では見劣りするだろうと思うと、気が引けてしまったのだ。失恋から二週間が過ぎても、めちやくちやに傷ついた心はなかなか上を向いてくれなかった。

食堂であの一夜の彼——皆川さんと遭遇してしばらくは、動揺のあまり失恋の痛みを感じずに過ごせた。私はだらしが無い女としてブラックリストに載ったのではないか、もうすぐ職を失ってしまうのではないかと、失恋どころの騒ぎではない恐怖に毎日戦々恐々としていた。

しかし数日経つと落ち着いた。あの夜に起きたことはお互いさまではないか。彼が私を糾弾する筋合いはないはずだ。……ホテル代とバーの支払いを踏み倒して逃げたこと以外は。

エレベーターが到着する音が響くと、考え事をやめて慌てて顔を伏せる。ここ二週間でにわかにはまった習慣だ。開いた扉からぞろぞろと降りてくる社員たちの中にあのスーツ姿がないことを上目遣いに確認すると、ようやく肩の力を抜いて顔を上げた。

同じビル内に彼がいる——

食堂での遭遇を境に、社内での何気ない行動はまるでロシアンルーレットのようなスリルを伴うものになった。お互いさまだからお咎めなしと、頭では言い聞かせていてもやはり怖い。

あの夜の詳細が記憶にないことも、色々な意味でさらに私を慄かせた。きっと私は恥知らずな色仕掛けを披露したに違いない。でも、あれから二週間が経つが、幸いなことに彼の姿は一度も見えていなかった。

エレベーターが五階に到着すると、さらなる恐怖をもって再び顔を伏せる。運の悪いことに人事

本部も同じフロアにあるのだ。五階には外部や他部署との接触を控える、セキュリティが厳重な部署が集められている。だから廊下はあまり人氣がなく、出くわすと余計に逃げられない気がする。

「……江藤さん、着いてるよ」

「すみません」

“開”のボタンを押してくれている東条主任の声に促されしぶしぶ降りつつ、俯うつむき加減に左右を確認する。どうやら彼はいないらしいとわかると、急にどつと疲労感を覚えた。

東条主任が隣を歩きながら不意に言った。

「今日のヒアリングの報告書は僕が作っておくよ」

「えっ、でも……」

少し意外な発言に驚いて顔を上げる。

ヒアリングとは、最新の消費者動向を得るため雑誌系の出版社やマーケティングリサーチ企業を不定期に訪問する仕事だ。しかし、情報を受け取るばかりでは相手先にメリットがない。貴重な時間を割いてもらうため、こちらも外部に出しても差し支えないぎりぎりの範囲でうちの社の情報を小出しにする。その匙さじ加減がなかなか難しい。

それに、知識豊富で読みの鋭い編集者たちと対等に渡り合うにはかなりの経験と話術がいる。そこは東条主任がお手のもので、私は同行していながら役に立つたことがない気がする。いつも主任の横で飾りにもならない笑顔を顔に張り付け、ひたすらメモを取るばかりだ。

「私、書きます！ 報告書は私の仕事です」

「でも、今日は三社とも雑談ばかりであまり収穫がなかったよね。書きにくいと思うよ」

勢い込んだ私を、優しい茶色の目が見下ろした。この二週間、なかなか直視できなかった主任の目をまともに見てしまい、私は思わず顔を逸らしてしまった。胸が軋きしんだ音を立てる。目が合うと頬を赤らめてしまう自分も、その目に見つめられる日を夢見ていた自分も、まだ私の中にいる。毎日が以前と変わらないから、変わりたくても変われない。

“彼が褒めてました。江藤さんとは仕事しやすいつて”

そう。堅かたくて女を出さないから——。総合企画本部の部屋の前で足を止め、彼の目から視線を微妙に外したまま必死に決意表明した。

「やります。そこを盛って書く訓練も必要ですから」

弱音を吐いたら思いを見抜かれてしまう気がした。彼が望まない感情は見せられない。すると主任も立ち止まり、私の痛いところを指摘した。

「そうだけど……。今夜はあっちの企画のリテイクもあるんじゃないの？」

“あっちの企画”とは、東条主任とは別のチームの課長から指示を受けた大画面テレビの用途開発の企画書だ。昨夜寝ずに仕上げた企画書は、午前中のミーティングで『方向性を変える』と敢あえなく却下された。書き直しのタイムリミットは明日。

「でも……」

返事に窮して黙り込む。正直なところ、企画書だけでも今夜中に仕上げられるのか不安だった。

企画書の作成作業は時間をかけた分だけ捗はかどるといような性質のものではない。突破口を見つけ

れば数時間で済むが、一晩考えて何も閃かなければ、明け方になって時間に追われながら苦し紛れの案をまとめるしかない。筋が悪ければ却下され、スタート地点に戻るだけ。その繰り返し企画という仕事なのだ。だから企画書の作成作業は自宅に持ち帰ることが多かった。書いては消す不毛の時間に、残業手当など厚かましくもらえない。

何時間かかるのか読めない企画書に、書きにくいとわかっている報告書。自分のキャパシティ内と言いつ切る自信はなかった。

「ああ……わかりました。……はい」

その時、曲がり角の向こう側から男性の声が聞こえてきた。どうやら電話中らしい。その声にどこか聞き覚えがある気がしたが、今は目の前の主任にどう答えるべきなのか、そのことで頭がいっぱいだった。

「他チームとの仕事には関与できないけど、報告書を書くぐらいなら手助けできるよ」

宥めるような口調で畳みかけられて項垂れる。報告書は遅くても訪問翌日には提出するのが鉄則だ。虚勢を張ったところで、パンクしてしまえば東条主任にも迷惑をかけてしまう。

「……すみません。今回だけ、お願いします」

唇を噛み、身体を二つ折りにして深く頭を下げた。タイムリミットの短い仕事が重なったのだから私のせいではないが、こんな精神状態だけに、無性に自分が不甲斐なく思えてしまう。許されるものなら泣きたかった。

「最近、少し疲れてるよね。しんどい時は頼ってくれていいから、僕には何でも言うて」

東条主任はいつも優しい。だけど、優しくされると余計に辛い。諦めきれない心もプライドも、すべてが痛かった。

「まあ今日の空振りは僕のミスだからね。この次のヒアリングは聞き方を変えないとなあ」

私の落ち込みを察したのか、東条主任が明るく言った。こんな気遣いまでさせてしまう自分が情けない。

「……わかりました。また後ほど電話します。……では」

曲がり角の向こうにいる誰かの声を聞きながら、どうにか明るい表情を作ろうと俯いて目をしばたたく。職場では絶対に泣かない。徹夜で作った企画書が意味のないものとして扱われても耐えるのだから。

「いえ、主任はさすがです。いつも主任の話術を盗もうとしてるんですけど、難しくくて」

不完全ながら私が何とか顔を復活させ明るい声を張り上げると、主任はIDカードをドアにかざしながらこちらを振り返って微笑んだ。

「ゆっくりね。江藤さんは難しい部署で十分頑張ってるよ」

（ああ、もう……）

せっかく踏みとどまった涙腺がまた危なくなつた。

「僕は先に席に戻ってるから、少し休憩しておいで」

主任の言葉で自分がどんな顔をしているのかを自覚する。閉まったドアの前でしばらくぼんやりと佇んだあと、ため息をついて目を擦り、曲がり角の先にある休憩室へ行こうと下を向いて歩き始

めた。

しかし角を曲がったところで立ち止まった。壁に寄りかかる男性の脚が目の前に現れたからだ。ぼんやりしていたせいで何も考えずにその脚を上へと視線で辿る。男性の顔を見た瞬間、私は声なき悲鳴を上げて跳び上がったしまった。

どうして油断していたのだろうか？ 人事本部はこの曲がり角を進んだ先にあるというのに。

皆川佑人——そう、声の主は彼だったのだ。

この間と違って今日は上着を脱いだシャツ姿だ。もう通話は終えたようで、彼はちょうどポケットにスマートフォンを入れているところだった。至近距離でまともに顔を合わせてしまい、立ちすくむ。

「……………」

彼は壁に寄りかかったまま腕組みをし、涙目で棒立ちしている私を冷やかな表情で眺めた。静かな廊下に恐ろしく長い沈黙が落ちる。しかし蛇に睨まれた蛙のように縮み上がりながらも、頭のどこかでは妙に冷静に感心していた。あの夜の私よ、よくぞこんなそびえ立つ氷壁のような男に果敢に声をかけたものだ、と。

見ず知らずの他人にしては明らかに不自然な間合いに、焦った私は何を思ったのか、肩にかけたバッグから財布を取り出した。

「あ、あの、バー……いえ、その」

か細い声が途切れて宙を漂う。財布を揉み絞りながら激しく後悔する。こんな場所であの話題は

ご法度だろうに。

「あの、その」

しどろもどろの私を無言で見守っていた彼は、私が意味をなす言葉を言えないのを見て取ると、ようやく口を開いた。

「バーとは、何のことでしょうか」

「えっ……?」

呆気にとられた私の手から財布が床に滑り落ちた。

同じネクタイだと思ったのは勘違い？ あの寝顔と同じ顔だと思ったのも勘違い？ ということ
は、あの一夜の相手は皆川佑人ではなかった……？

安堵しているはずなのに同時に落胆も感じ、自分でも説明しがたい感情に襲われる。その場を取り繕うことも忘れて彼を見上げたまま突っ立っていると、不意に彼が私の足元に屈んだ。揺れた空気でふわりと鼻をかすめた香りは、記憶のどこかに存在している気がした。

「財布、落ちましたよ」

手のひらに財布が載せられたのに、緊張でお礼も言えない。彼はそれきり私に用はないらしく、軽く会釈してエレベーターホールの方に歩き始めた。

「あっ、ありがとうございます」

とにかく一夜の相手でないなら首は繋がったのだ。ようやくまともに声を出せた私は彼の背中に礼を言い、ほくほくしながら財布を仕舞おうと肩からバッグを下ろした。

「……ああ、そうだ」

思い出したように立ち止まって振り向いた彼に、再び私の動きが止まる。彼の唇の端がかすかに上がったかと思うと、その唇からとんでもない言葉が飛び出した。

「ストッキングが——」

頭に浮かぶのは、トカゲの尻尾のように残して逃げたストッキング。私のバッグが派手な音を立てて床に落ちた。飛び出したペンが転がる音が止まると、静かな廊下に彼の落ち着いた声が響いた。「伝線してます」

そう一言告げると、彼は顔の筋一つ動かさずに向きを変え、曲がり角の向こう側へと歩いていった。

「その男、間違いなく黒だね」

「えー……」

昼休みの社員食堂で、茉由子が箸を振りながら断言した。

あれから数日。髪が抜けるかと思うほど考え抜いた末、私は茉由子に意見を求めた。もちろん彼の名前と東条主任への失恋は伏せて、ただのお酒の失敗ということにしておいた。私に一切浮いた話がないことを知っている茉由子は、逆ナンという暴挙に最初は呆れ返っていただけだったが、社内でも相手に遭遇した場面に話がさしかかると俄然食いついてきた。

あの夜の相手が皆川佑人と決まったわけではない。廊下での会話——と呼べるほどでもないわず

か一分ほどのやりとりを何度も検証した結果、私は願望を込めてそういう結論にこじつけたのだが、茉由子はばつさり断定した。

「それでその男、間違いなくわかって言ってるよ」

「でも、本当にストッキングが伝線してたの」

あのあと、シヨックから立ち直れないままペンを拾おうと屈んだ私の右ひざに、ピピピと嫌な感触が走った。伝線が拡大したらしい。

「だからごく単純に、親切で教えてくれたとか……ないか……」

馬鹿じゃないのと言いたげな茉由子の表情に、私の台詞は尻すぼみになった。

「親しい女同士なら言えるけどさ。廊下ですれ違っただけの、赤の他人の、しかも男がいきなり伝線してます」とか言う？ どう考えても普通じゃないでしょ」

「だよね……」

「ついでにその男、性格も黒いね」

「だろうね……」

もしわかっていて言ったのなら、私が苦手とする、真綿で絞めるようにネチネチいじめる類の人種だ。喉に詰まりそうなご飯の塊を飲み込んだため息をついた。

「一度見た社員データを完璧に記憶するらしいよ」

やはり最悪だ。

男の正体を知らない茉由子は呑気な方向で慰めてくれる。

「でもいいんじゃない？ そのあしらい方だと言いつらされたり、付きまどわれたりとかないよ。慣れた男なんだね」

「そんな心配はしてないよ。だって、相手は私だもん」

今、自分に差し迫っているのはもつと由々しき問題だ。しかしそれは茉由子には明かせない。

「今まで男に付きまどわれた経験は痴漢ぐらいだし」

項垂れて煮魚をつつきながら私がぼやくと、茉由子が大笑いした。

「そんなに落ち込むことないじゃん。その男、格好いいんでしょ？」

「えっ……？」

いきなり皆川佑人の容姿について聞かれ、返答に困った。確かに外見はいい。でも、それを口にするのは照れ臭いような恥ずかしいような、どこかむずむずと落ち着かない感じがした。茉由子は相手が皆川佑人だと知らないのだから、素直に言ってしまう方がいいはずなのに。

「まあ、一般的にはそうだね。私のタイプじゃないけど」

原因のわからない緊張のせいで、妙に上からで勿体ぶった表現になってしまった。

「なら、いいじゃん。一度きりとはいえ、格好いい男を落とせたんだから目的達成したわけですよ。

ナツも捨てたもんじゃないってことだよ」

「いや、だけどさ……」

この事件の惱ましいポイントは、実は他にもあるのだ。

「落とせない気がするんだよね……」

「どういこと？」

ずいぶん長い間、恋人がいない。かれこれもう五年になる。

「つまりその、実際には最後まで行き着いてないような気が……」

「はあ？」

茉由子は今さら何だという呆れ顔で私を眺めた。

「いや、わからないけど。記憶がないし」

下世話すぎてはつきり言えないが、はるか昔の彼氏がいた頃の記憶を思い起こせば、翌朝はまだ身体に感覚が残っていたように思う。しかしあの夜、逃げる時はそれがなかった気がするのだ。そのことがずっと引つ掛かっているが、今となってはあやふやで検証しようがない。

茉由子の沈黙に焦り、口が余計なことまで喋り出す。

「き、キスした記憶はあるんだよね」

ものすごく夢中になった記憶も。彼のネクタイを解きながら、身体の髄が痺れるような愛撫を受けた記憶も。

「ああ……やめよ」

社員食堂で思い出す内容ではない。頭を抱えた私を眺めながら、いつの間にか食べ終えていた茉由子が冷静な顔でお茶をすすった。

「お互い裸だったんだから、何もなかったのはありえない？」

「……………」

それだ。だとすれば、私はやはり救いようのない魅力ゼロ女ということになる。しかもそれだけでなく、リストラの鬼に醜態を晒すだけ晒したことになる。

無言で落ち込む私の気持ちなどお構いなしに、茉由子は痛いところを突いてくる。

「それで、それ誰よ？ 五階で出くわしたんなら部署はわかってるんでしょ？」

返答に窮した私は煮魚の骨取りに気を取られているふりをした。しかし茉由子の追及は核心に近づいていく。

「五階っていったら人事本部と知的財産権本部と、あと何だっけ？」

「……………」

「まあ人事本部はさすがにまずいとして、えーと、どこだろ」

「……………」

「ねえナツ、どこよ？」

「……………人事本部」

あっさりと観念したのは、あの事件の深刻度が冗談の域を超えて、いよいよ切実になってきたからだ。私の周囲で皆川佑人の情報をもたらしてくれそうなのは茉由子しかない。

「やだ、それまずくない？ そもそも何で会社の人間を狙っちゃったのよ？ 同じフロアにいたら顔ぐらい覚えてるでしょ」

「だって……………酔ってたし、今までの人、見たことなかったし」

「だから誰」

「あの……………その……………」

茉由子の反応が怖くて、下を向いて答える。

「……………皆川って人」

恐ろしく長い沈黙が落ちた。煮魚はもうとっくに食べ終えてしまっている。茉由子がなかなか反応しないので、仕方なくお皿の端に小骨を並べた。大して自慢にならないが、昔から魚を綺麗に食べるのだけは得意だ。こりゃ猫泣かせだねと、よく祖母に感心されたものだった。

どうでもいい回想に逃げていると、茉由子がようやく口を開いた。

「……………そんな寒いホラ吹いてると首が飛ぶよ」

「ホラじゃないよ。妄想でもないし。だから落ち込んでるんじゃない」

「嘘……………」

また少しの沈黙ののち、茉由子が重々しく言った。

「ナツの首に線が見える」

「え？」

「リストラ線」

「やめてよ！ 本気で悩んでるんだから」

涙目で抗議すると、茉由子は真面目な顔で声をひそめた。

「お互いさまだし、会社の外で起きたプライベートなことにとにかく言われる筋合いはないよ。……………と思いたいね」

笑い飛ばしてくれた方がまだ良かったかもしれない。真面目に慰められると余計に落ち込んできた。

「本当に、何であんなバカなことしたんだろう。もうお酒なんか飲まないから、職だけは失いたくない。結婚もできそうにないし、ずっと一人で生きていかなきゃいけないのに」

嘆いている間に本気で半泣きになってきた。

「大丈夫だって。ナツは真面目に頑張ってるし、職奪われるようなことしてないじゃん」

ついさっき「まずいよ」を連呼した口で大丈夫だと言われても説得力がない。

「それに彼はあんまり社にいないみたいだよ。週に二、三日しか来てないって。だからそんなにいくわすことないよ」

「どういふこと？」

思わず涙目を上げて食いついた。

「人事コンサルタントとして期限付きで来てるの。常駐だけどベツタリじゃないって」

「うちの社員じゃないの？」

確かにこの間ちらつと見た彼のIDカードには所属部署名の記載がなかった気がする。

「正確にはね」

そこで菜由子は有名なりサーチ系の企業グループの名前を挙げた。私もマーケティングセミナーで月一回通っている大企業だ。

「そうか……しばらくの辛抱なのね」

期限付きと聞いて、ようやく希望が湧いてきた。

「よし。今後は出くわさないように気をつけて、これ以上粗相がないようにすれば、一介の平凡女なんてそのうち記憶から抹消されるよね」

自分が平凡であることに感謝するのは初めてだ。

「いやいや、それはないな」

しかし菜由子は顔をしかめて手を振った。

「この間言わなかったっけ？ 皆川氏は一度見た社員データを完璧に記憶するって」

「菜由子、慰めてくれてるんじゃないの？」

「実はちょっと面白がつてる。だって、心配したつてもう遅いじゃん」

菜由子にはやりと笑った。彼女の関心は私のクビどころとは違うポイントに移ったらしい。

「あの冷徹男がナツみたいな平凡女子をいじってくるなんて、わくわくするよ」

「しなご」

無愛想に答えた私に、菜由子はここからが美味しい部分とばかりに身を乗り出してきた。

「それで、どんな感じだった？」

「何が？」

「彼のベッド」

語尾にハートがついていそうな菜由子の声に、飲みかけていたお茶を思わず嘔き出しそうになった。

「切れ者らしいし、謎が多いし、どんな感じが興味あるわあ。ナツには刺激が強かったんじゃない？」

「だから覚えてないんだってば」

「ほんとに？」

「ほんとに」

少し嘘だが力を込める。

「あーあ、もったいない。あ、でもキスは覚えてるんでしょ？」

「おぼろげにしか」

思い出しただけで顔が火照ってきたので、苦しまぎれに話題を菜由子に振る。

「それはそうと、菜由子は？ 誰か見つかった？」

少し前に恋人と別れてからというものの、菜由子は合コンに行きまくっている。どこで見つけてくるのか、菜由子には合コンのツテがたくさんあるのだ。

「うん。実はね。ふふふ」

簡単には皆川氏の話題から逸れてくれないだろうと思ったのに、菜由子は嬉しそうに乗ってきた。

「私が一方的に気に入ってるだけなんだけどね。席が遠かったし、あまり話もできなかった。でもほんと、私の好みど真ん中なのよ。格好いい上に真面目なの！」

「へえ」

いつになく菜由子に力が入っている。いずれ落としてしまうのだろう。とびきりの美人というわ

けではないのに、次々と男性を射止めてしまう菜由子は羨ましいほどの恋愛体質だ。

「迫田^{さきだ}って覚えてる？ 前にナツも来た合コンで幹事だった人」

「ああ……たしか損保の人だよ。ちよつと賑^{にぎ}やかな感じの」

「うん。迫田がリベンジでまた幹事やってくれたの。ナツも来た前回の合コンは最悪だったじゃん？」

「かなり前だよ。軽い人ばかりだったかな」

「そうそう。いくらエリートでもあんなに女遊び激しいのは無理だよ」

その誰彼かまわぬチャラ男たちですら私を素通りしていった、寂しい合コンを思い出す。

「だから今回は厳選してねって念押ししたの。そしたら、迫田の先輩で合コン嫌いっていうその人を引きずり出してきてくれてさ」

菜由子の話に相槌^{あいづち}を打ちながら、社員食堂の入口をチラリと窺^{うかが}う。初めて社内ですべて皆川佑人に遭遇した時はこのぐらいの時刻だった。つい入口を気にしてしまうのは、怖いもの見たさと彼に遭遇する危険を回避するためだ。

「そしたらその人、誰とも連絡先を交換しないで一次会であっさり帰っちゃったのよ」

そこで急に菜由子が大袈裟^{おおげさ}な身振りで私の手を取り握り締めてきたので、上の空で聞いていた私は驚いて跳び上がった。

「な、何よ、急に」

「そこでナツの出番なのよ」

「何で私」

「その人を食事に誘い出すのに協力してくれない？」

「どうやって？」

「迫田とナツとその人と、四人でご飯に行くの。迫田がナツ狙いのふりしてき、私とその人が協力するって設定で」

早口で一気に言い終えると、茉由子は期待で目をきらきらさせて私を見つめた。ちよつと待てよと視線を逸らし、言われたことを頭の中で反芻する。

「あのさ……。迫田くんが私狙いって、少し無理があるよ」

自慢ではないが、合コンで見初められた経験は皆無だ。

「大丈夫、大丈夫！ 迫田なら乗ってくれるし」

しかし茉由子は私の懸念などお構いなしだった。

「ていうか、これ迫田の提案だし。ナツは私の人選だけど」

「私なら本命を横取りされる心配ないってことだよね？」

「まあまあ、そう卑下なさらず」

茉由子は当たらずとも遠からずといった風にあつてごまかした。女の友情などこの程度だ。

「ほら、皆川情報が入ったら流すからさ。今日は来てるよとか、今週は大丈夫とか」

流っていた私はこの条件で呆気なく陥落した。

「……わかった」

「ありがと、ナツ！」

「皆川情報をよろしく」と念押ししたところでお昼休憩をお開きにして茉由子と別れ、私はポーチを片手に五階のトイレに向かった。気分は昼食前より少し上がった。

迫田くんは茉由子の大学時代の同級生で、私とも同い年だ。一度しか会ったことはないが、女子を露骨に選り好みする男性たちと違って分け隔てなく接してくれる、ノリのいい明るい印象の人だった。失恋相手の東条主任を眺めていなければならぬ毎日では、心がなかなかトンネルから抜け出せない。他の男の人と楽しく喋るのはいい気晴らしになりそうだ。それに何より、あの皆川佐人の動向が入るのはありがたい。

五階のトイレには誰もいなかった。ところが、軽い足取りでトイレの鏡の前に立った私は、続いて入ってきた人物を見てぎょつとした。

「あ、江藤さん！ 偶然ですね」

入ってきたのはこのフロアの住人である野暮ったい作業服女子ではなく、鮮やかなスーツ姿の堀内さんだった。なぜ五階のトイレに一階の受付嬢が？ それまでの気分が一気に萎む。

「お疲れさまです」

なるべく会話したくないし、早くメイクを直してトイレを出よう。テンションの低い笑顔とともに会釈し、私は鏡に視線を戻した。しかし堀内さんは私の隣にポーチを置き、鏡越しに話しかけてきた。

「最近、お仕事どうですか？」

どうと聞かれても曖昧すぎて答えづらい。

「ああ……まあまあです」

「江藤さんは東条主任とまったく同じ仕事内容なんですか？」

「一部同じなだけです。会議事務局とマーケティングだけ一緒です」

「事務局って、商品戦略会議ですか？」

「そうです。月一回定例の」

こちらは早く歯磨きをしたいのに、堀内さんは鏡越しにがつつり視線を合わせて質問ばかりしてくる。

「商品戦略会議って、取締役が全員出席する会議ですよ？ あれの事務局さんなんだ？ すごい」

「いえ、そんなことは」

東条主任と二人で事務局を務めているのは、十年先までの長期開発戦略を扱う重役会議で、会議内容は極秘だ。とはいえ事務局がすごいわけではないのに、堀内さんは大袈裟に目を丸くしてみせた。表情の作り方にわざとらしさを感じてしまうのは、私の心の問題だろうか。

「ああいう会議って情報の扱いが大変そうですね」

「そうですね。私たちは守秘義務の誓約書を書かされるぐらいですから」

「私たち」とわざわざ東条主任との連帯表現を入れたのは、私のくだらない意地だ。でも、共有することが仕事しかないのがかえってみつともなくて、言ったあとで自己嫌悪に陥る。

「ちよつと失礼しますね」

それでも東条主任との仕事は私の聖域だ。これ以上は話す必要もないので、私は彼女に一言断つてから歯磨きを始めた。

しばらく嫌な沈黙が続く。彼女はここに何をしに来たのか、出ていく気配もなくスマートフォンを取り出していじり始めた。私が歯磨きを終えて会話を再開できるまで時間を稼いでいるようにしか見えず、だんだん腹が立つてきた。五階トイレは我々作業服女子の貴重な休憩場所だ。早く出ていってよと、意地になって歯を磨きまくる。

ところが堀内さんは涼しい顔で、もう直す必要もないぐらい綺麗なメイクにさらに手を加えたあと、髪を丁寧にブラッシングし始めた。

磨きながらつくづく思う。鏡って残酷だ。向かい合っていると相手しか見えないのに、こうして並ぶと二つの顔の造作の違いを嫌というほど自覚させられる。

しばらくしても堀内さんが出ていく様子がないので、私は諦めて先に撤収すべく口をすすいだ。しかし、彼女はそれを待っていたのだろう。それまで黙っていたのに急に口を開いた。

「あの……東条主任からお聞きになりますか？」

何を？ 肝心な部分を意味ありげに伏せた聞き方に内心苛立った。鏡の中の堀内さんは可愛らしく小首を傾げて私を見つめている。某由子が同じ聞き方をしたなら何も思わなかっただろうに、堀内さんだとしてこんなにいやらしくなるのだろうか。そして、その苛立ちは次の言葉で衝撃に変わった。

「私たち、将来の話をしてるんです。江藤さんはもうお聞きになったかなと思って」

やはり鏡は残酷だ。奥深くに隠した本心も一瞬の動揺も、すべてを赤裸々に映し出す。鏡に映る二つの顔の色は、明らかに勝者と敗者のそれだった。

私の表情の微細な変化も逃さず捉えようとする意地の悪い視線から逃げも隠れもできず、必死の演技で口を開く。

「あ……聞いてなかったですけど、おめでとうございます」

「えっ、お聞きになってなかったんですか？ ごめんなさい、フライングしちゃった」

堀内さんと一緒に笑おうとしたが、鏡の中の私は到底笑顔に見えなかった。

「江藤さんは大事な仕事仲間だから、真っ先に報告してるかなって思ってた」

持ち上げているようで、さりげなく言葉の端々で私の立ち位置を強調してくる。それには答えず、鏡から顔を逸らしてポーチに歯ブラシを押し込んだ。

「そういえば彼、最近の江藤さんは元気がないって心配してたから、プライベートの報告は遠慮してるのかも」

この会話を切り上げるにはもうここを出るしかない。

しかし、トイレを出ようとする私に彼女も歩調を合わせてついてくる。私は意地を振り絞って笑顔を作った。

「仕事で色々あった時ですかね？ 今は全然、元気ですよ」

「そうなんですか？ 良かった」

堀内さんは肩をすくめて微笑み、じっと私の目を見つめた。

「元気がないって聞いて、もしかして私、江藤さんに無神経なことしちゃったのかなって……」

やはり私の東条主任への気持ちを見抜かれていた……？ 私のプライドの一番大切な部分が暴き出されたような気がした。

「まさか、違いますよ、そんなことあるわけじゃないですよ」

はつきり言われる前に否定してしまったのでは、かえって認めたようなものだ。わかっているが、堀内さんの狡猾な誘導に耐える余裕がなく、苦し紛れに言葉を連ねる。

「東条主任は上司ですから」

「ですよー」

しかし語るに落ちる状況に耐えられなくなり、廊下に出たところでついに自分の限界を悟った。

「あ、すみません。リップ塗るの忘れちゃったから戻ります。じゃあここで」

彼女の目を見ずに笑顔を作り、踵を返す。わざとらしくてももう構わない。

ところが、堀内さんははるかに上手だった。

「そうだ、江藤さん」

これで解放されると思ったのも束の間、離れるかに思えた足音が軽やかに翻ったのと同時に、腕に甘い香りが巻き付いた。

「さっきの話、彼には内緒でお願いしますね。フライングしたのがばれたら怒られちゃう。ふふ」
小声でさらなる毒が流し込まれた。

「じゃあ、またお話ししてくださいね。楽しかったです」

耳元の甘い声と巻き付いていた腕がふわりと離れ、優雅なヒールの靴音が去っていく。残り香を纏う腕を、痛みを感じるほど強く擦った。

午後の始業間近な廊下は人通りが多かった。涙腺が崩壊しそうな顔を上げることできず、私は俯いたままトイレに戻った。

第三章 冷徹男の救いの手

眠い。……眠い。ものすごく、眠い。

数日後、金曜日の午後四時。私はマーケティングセミナーに出席するため、大手リサーチ企業のオフィスビルを訪れていた。さすが一流企業で、経費削減で空調を抑えているうちの社と違い、最上階にあるセミナーホールは暖房がほどよく効いている。

例によってこの日も徹夜で企画書を仕上げた私の瞼は鉛のように重く、何度持ち上げても落ちてくる。

うちの部署には事務職がないので、諸々の雑用は若手だからという理由で——暗黙には女性だからという理由ですべて私がやっている。今週はそうした雑用が集中していて、自分の仕事の持ち帰り残業が多かった。セミナーで眠気に襲われないうよう、普段は苦すぎて飲めないブラックコーヒーを無理して胃に流し込んだのに、溜まった疲労には焼け石に水だった。

寝てはいけない。聞いていないと報告書を書けないのだから。

しかし目を皿のように開いて必死にメモを取っていても、文字も音声も頭に入ってきてくれない。このマーケティングセミナーは様々な業種の企画担当者がヒット商品の開発体験談や開発手法などをレクチャーするもので、月に一度開催されている。元々は東条主任と一緒に参加していたが、

先月からは私一人だ。だから責任重大だというのに、この眠気では報告書が危うい。受付で渡されたレジュメに目を凝らし、何度も手の甲をつねった。

セミナーを主催しているのは人材開発からコンサルティング業、情報サービスまで多岐にわたって事業を展開している大手企業グループだ。あの皆川佑人が所属している会社でもある。つまり、ここにいると彼と遭遇する危険が非常に高いということだ。

それなのに、今日は茉由子から例の皆川情報が入ってきていない。うちの会社にいるのか、他のクライアント先を訪問しているのか、それともこのビルに潜んでいるのか、彼の所在は不明だ。だからこのビルに入る時はまるで敵地に潜入するようで、かなりびくびくしてしまった。うちの社と違って全員スーツ男子なので、遠くからでは見分けにくいのだ。

しかし彼がコンサルティング部門の人間ならばマーケティングセミナーとは無関係だろうし、このホールにいる限りは安全に違いない。

そう考えると余計に臉が重くなる。何度も首がかくくと折れ、慌てて頭を起こすこと数回。ペンを落としかけては握り直し、自分を叱咤して必死にメモを取る。セミナーは中盤にさしかかっており、ここからが講演の山場のはずだ。しかし、昨夜だけでなくこのところずっと持ち帰り残業で過労だった私は、ついに力尽きてしまったらしい。

「終わりましたよ」

誰かが遠くで何か言っている。

「着きましたよ」なら、何度か言われた経験がある。徹夜が続いた週の後半、帰りの電車で運良く

座れた時などは特に危ない。県境をはるかに越えた終着駅の風景を私が知っているのはそのせいだ。(え……「終わりましたよ」)

頭の隅で鳴り響くただ事ではないという警告にはっと目を開けると、そこは電車ではなくセミナーホールだった。満席に近かったホールにはもうほとんど人の姿がない。

「もうすぐ空調が切れますので」

頭上で響くこの声には聞き覚えがある。ほとんど確信に近かったが、別人であることに一縷の望みをかけて、身を縮めながら怖々と視線を上げる。

よりにもよってこんな場面を見られてしまうとは。冷ややかに私を見下ろしているのは、隣の机に寄りかかって腕組みをした皆川佑人だった。

「すっ、すみません」

慌ててノートと筆記用具を片付け始めたが、そうしている間に立ち話をしていた最後の数名がセミナーホールを出ていってしまった。

「僕が施錠します。クライアント先の方ですので、少し話を」

ばたつく私の頭上で彼の声があった。私ではなく、出席者を見送るため出口で待機しているセミナーの担当者に言ったらしい。

「わかりました。では、よろしく願います」

女子社員のしとやかな声が返ってくる。行かないでという私の心の叫びが届くはずもなく、私たち二人を残してドアは恭しく閉じられてしまった。